

高齢期の孤独とその解消に関するソーシャルワーク実践の考察  
—文献レビューと英国の取り組みを手がかりに—

社会福祉学専攻 三浦 和

要 旨

近年孤独による死亡率との関連や経済への影響が指摘されているが、高齢期においては、一人暮らしや家族との死別、病気や怪我による心身の重大なトラブル等、複合的な喪失などの問題がある。高齢者が生活を営むなかで、このような問題に直面することは避けがたく、この時、孤独を抱えた高齢者にどのような支援を展開していくのか、その人のウェルビーイングを支援するソーシャルワーカーは、孤独の解消に向けた実践方法を確立していくことが求められる。しかし、わが国の展開をみると、「地域共生社会」との関連から、社会的孤立の解消に議論が終始しており、孤独の解消に関する具体的な実践の蓄積は充分とは言い難い状況にある。

他方で孤独対策の展開をみると、「孤独対策先進国」とされる英国では、孤独の議論は政策から地域の支援体制にまで及んでいる。このことから英国の孤独対策とソーシャルワークの文脈を辿ることで、孤独の解消に向けたソーシャルワーク実践への示唆を得られると考えた。

そこで本研究では高齢期の孤独の解消に向けた支援について先行研究の考察を基に、ソーシャルワーク実践の試論を示すこと、ならびに孤独に対応する社会の在り方とその仕組みについて、英国の取り組みを概観し、ソーシャルワーカーの支援展開について整理することを目的に文献レビューを実施した。

本研究は、2つの方法を用いた。一つには、高齢期の孤独の解消に向けた支援実践であり、海外文献の抽出には「Google Scholar」と「EBSCOhost」、国内文献の抽出には「CiNiiResearch」を用いた。検索ワードには、海外文献では「older adults」「elderly」「loneliness」「social-work」、国内文献では「高齢者」「孤独」「ソーシャルワーク」「支援」「サポート」を組み合わせ使用し、タイトル検索を行った。抽出された文献から、孤独の要因と問題点、支援の方向性等の要点について整理した。更にその内容をコード化し、類似のコードをまとめてサブカテゴリー、カテゴリー化を行った。対象となった文献は、海外文献を含め14件だった。

2つ目に、孤独に対応した社会について、英国の政策に着目し、そのなかでソーシャルワークの展開を考察した。文献の抽出には「CiNiiResearch」を用いた。検索ワードには「イギリス」「英国」「孤独」を組み合わせ使用し、タイトル検索で抽出した。対象となった文献は海外文献も含め15件だった。

分析の結果、高齢期の孤独の解消に向けたソーシャルワーク実践に関する先行研究は、【A 要因】2サブカテゴリー【B 問題点】1サブカテゴリー【C 支援の方向性】6サブカテゴリーにまとめられた。またソーシャルワーク実践において、Germain (1992) のエコロジカルな視点を基盤としつつ、ソーシャルサポート・ネットワークの活用が重要であり、なかでも孤独の支援に関しては、【情緒的・感情的サポート】の有用性が指摘された。

また対象文献から Hagan (2021) の論考に依拠し、孤独に対するソーシャルワークの実

実践モデルをまとめた（図 1）。実践の流れは次のとおりである。まず、孤独を表出された高齢者に対して、孤独の程度の評価と要因を検討する。この時、慢性的な孤独感で、心理支援などを要する場合には医療機関など他機関への紹介が想定される。次に、本人がもつネットワークの特性を生活モデルに基づき評価する。このネットワークの特性とは、本人を取り巻く環境からどのような支援が提供されているのかということである。これによって、本人に不足しているサポートを見極める必要がある。そして個別のアプローチでは、サービスの利用はもちろんのこと、高齢者本人の内的側面にも留意しなければならない。ここで【情緒的・感情的サポート】の効果が期待されると同時に、ソーシャルワーカー自身はその役割を担うことも想定される。このような場合ソーシャルワーカーは自らもサポートを提供しつつ、対象者の相互作用やストレスに着目した支援が求められる。つまり、孤独の解消はサービス志向によるものではなく、対象者により寄り添い、その内面性を捉えていく伴走型の支援を展開することが望まれる。そして、高齢者自身が孤独の解消に向けて努力する主体性やエンパワメントを促していくことが、実践における重要な観点であるとまとめられた。

孤独に対応する社会について、英国の政策や取り組みからは、EBPM (Evidence Based Policy Making) とアウトカム尺度の必要性が指摘された。また、英国の政策における社会的処方とリンクワーカーの機能からは、地域の社会資源を活用した支援体制の有用性がまとめられた。一方で、ソーシャルワーカーとの機能の棲み分けが明らかになった。

わが国においては、社会資源の開発や活用には課題があり、このことを考慮すると、ソーシャルワーカーに求められる実践は、個別援助に止まらずメゾ・マクロな領域においても求められていると整理できた。

本研究では高齢期を対象として扱ったが、孤独は全世代での課題であり、各年代におけるソーシャルワーク実践の展開が今後求められる。そのためにはソーシャルワーカーが孤独を客観的に捉えていく手法を確立していくことが重要となる。

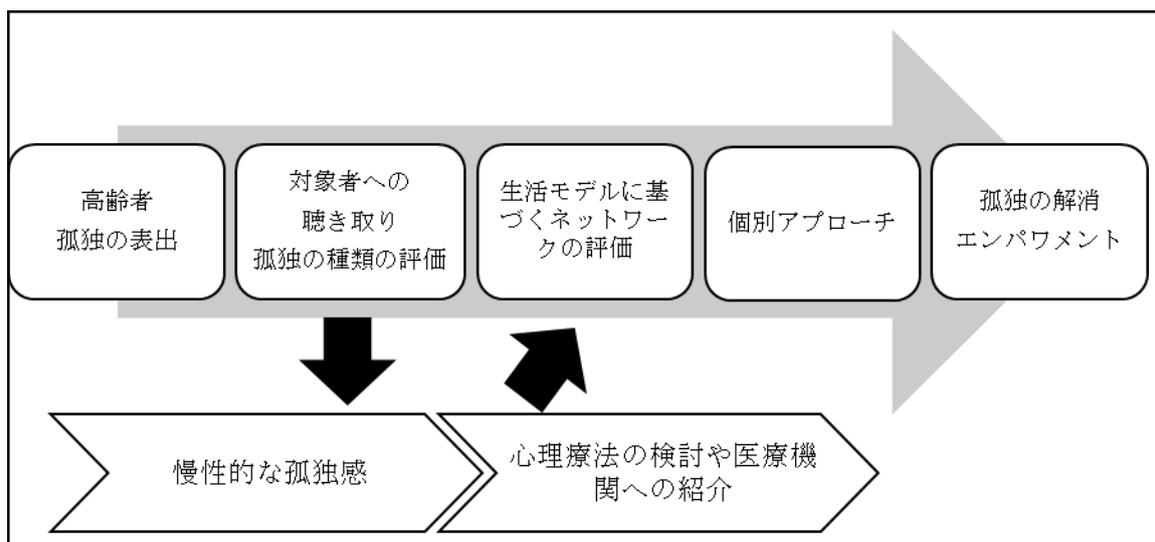


図 1：高齢期の孤独とソーシャルワーク実践のモデル